

令和7年度 上田市立南小学校 学校自己評価シート【後期】

学校教育目標		めざす子どもの姿	評価基準				総合評価	
つよく ただしく あたたかく		えがお輝く南っ子	A…達成できた B…おもね達成できた C…やや達成できなかつた D…達成できなかった				今年度は、グランドデザインの目標を意識し、職員が授業のユニバーサルデザイン化やICT活用に重点を置き、児童の「ひざつき清掃」や「さんづけ」を通して、互いを尊重する土壌が整ってきている。学年を超えたチーム支援体制も、多角的な児童理解に大きく寄与した。一方で、児童が自ら「問い合わせ」を持つ主体的な学びや、深く「聴き合う」姿勢、家庭での生活習慣の確立には個人差があり、継続的な指導の必要性を実感した。来年度は、これらの成果を基盤としつつ、支援の標準化をさらに進める。地域や中学校との連携を強化し、家庭との対話を深めることで、一人ひとりの可能性を拓く教育を追求していきたい。	
目標	評価項目	評価の観点	A	B	C	D	成果と課題	
【自分の考えをもち表現し合う】 「わくわく学び合い」を合い言葉に	■インクルーシブな視点での授業改善	テーマ別の職員グループによる授業改善や、合理的配慮と授業のユニバーサルデザイン化	○				視覚支援や掲示物の工夫により合理的な配慮を意識した授業を展開できた。一方で、多様なニーズを持つ児童一人ひとりに集団指導の中でどこまで応えきるかについては、難しさを感じる面があった。	
	■授業の3観点を意識した授業づくり	子どもから生まれる“問い合わせ”から始まる授業づくり、メリハリある過程、確実な見届け					算数のルーティーン化や振り返りの充実により学習の流れの理解が進んだ。しかし、児童自ら「問い合わせ」を生む導入の工夫には課題が残ると感じているため、引き続き研究していきたい。	
	■「考える・聴き合う・伝え合う」活動の重視	“一人ひとりで学ぶ”と“みんなで学ぶ”場面の効果的な位置づけ					ペア学習等を通じ自分の考えを話せる児童が増えた。しかし、相手の話を自分の学びに繋げる「聴き合う」力には個人差を感じているため、日常の授業の中で引き続き指導していきたい。	
	■子どもと創り出す探究的な学習の充実	地域やSDGs等を取り入れた軸にしたカリキュラムづくり～日常的な探究活動～					生活科や地域施設利用を通じ身近な対象への探究が深まった。一方で、活動を年間計画の中に有機的に位置づけることには、児童の実態に合わないこともあります、難しさを感じる面もあった。	
	■ICT機器の効果的な活用による授業づくり	学習内容や児童の実態や必要感に合わせてICT機器を有効活用					デジタル教科書等の活用により視覚支援や意見共有がスムーズになった。ただ、思考を深める「道具」としての活用には個人差を感じているので、活用場面をさらに精査していきたい。	
【根気よく清掃に取り組む】 「どんどん磨き合いで」を合い言葉に	■無言清掃・気づき清掃の推進	高学年がお手本となる“南小の宝：ひざつき清掃”の推進や、協働することのよさ、奉仕の大切さの自覚を促す	○				伝統の「ひざつき清掃」が定着し、一生懸命取り組む姿が見られた。しかし、意義を自覚し自律して取り組む点では指導が必要だと感じる面があり、継続して子どもたちと向き合っていきたい。	
	■望ましい生活習慣の育成	心と体を自分で守ること（学校生活や登下校時の安心安全な行動） 生活習慣3本柱（家庭学習・メディア・就寝時刻）の推進	○				家庭と連携し安全指導や生活習慣の啓蒙に努めた。一方、メディア利用時間や安全な廊下歩行などの行動定着には難しさを感じる面があり、今後も粘り強く指導していきたい。	
	■体力・健康向上プラン	一校一運動（持久走）や外遊びの充実、朝のストレッチ運動による心身の柔軟性形成	○				朝のストレッチが定着し、心身の柔軟性向上に寄与した。一方で、暑さ等の環境変化に合わせた活動継続や全校での意識向上には、まだ工夫が必要だと感じる面があった。	
	■チーム支援体制の構築	学年の先生交流、合同授業等によるチーム支援学年、特コ・いじめ不登校対策委員会の充実	○				学年内や特別支援担当との連携により、多角的に児童を見守る体制を整えることができた。多くの職員で関わることで多面的な理解に繋がった一方、具体的な支援方法の共有については、更に職員で進めていきたい。	
南小の宝 【明るいあいさつが響き合う】 「にこにこ響き合いで」を合い言葉に	■道徳・人権教育・特別支援教育の充実	人権感覚、折り合いをつける力の育成や、多様性を包み込むインクルーシブ教育の推進	○				多様性を認め合う意識は高まったが、トラブル時に相手を尊重し「折り合いをつける力」を育むことには個人差を感じているため、引き続き丁寧に指導していきたい。	
	■児童会を中心とした学校生活・交流活動の充実	生活をよりよくするために、みんなで創り上げる児童会や、縦割りや姉妹学級での異学年交流の活性化。全校で取り組む学校行事での学び合い。	○				児童会まつり等の交流により異学年間の親睦が深まった。一方で、多忙なスケジュールの中で各活動に十分な意味づけを持たせることには、難しさを感じる面があった。	
	■自己肯定感向上に向けた取り組みの充実	職員も児童も「さんづけ呼称」で広がる受容の輪	○				「さんづけ呼称」の徹底により互いを尊重する意識が浸透した。しかし、一部で見られる呼び捨てや呼称への抵抗感を持つ児童への対応には、難しさを感じる面があった。	
	■あいさつ・返事・歌声の充実	あいさつ・返事の推奨による認め合う雰囲気づくりや、学年学級・音楽集会での歌声の充実	○				気持ちの良い挨拶や歌声に成果が見られた。一方で、指名後の返事や立ち止まっての挨拶を習慣化させることには個人差を感じているため、今後も大切に指導していきたい。	
家庭・地域との連携 ～ひらくつながる・ともに創る南小～	■学校運営委員会・南っ子応援隊との連携	・信州型コミュニティスクール（CS）の活用・発展 ・子どもの自立のための保護者との連携や保護者への子どもたちの様子の発信（授業参観・通信・保護者との懇談等）	○				・ボランティアの多大な協力により教育活動が豊かに支えられた。一方で、その成果や感謝を地域へより広く発信していく点では、まだ十分に手が回らず難しさを感じる面があった。	
	■家庭・PTAとの連携	・家庭での生活習慣3本柱（家庭学習・メディア・就寝時間）の推進					・懇談会やボランティア活動を通じ情報共有が進んだ。一方で、日常のありのままの学校の様子をよりきめ細かく発信していくことには、難しさを感じる面もあった。	
	■地域（中学校区）との連携	・幼保小中でつなぐ支援の連携や、民生児童委員会や自治会との連携（幼保小接続カリキュラム・移行支援会議・小中の接続の充実等）					・地域の方から学ぶ機会をさらに増やし、交流を深めていきたい。コミュニティ・スクールとしての活動を可視化し、地域全体で子どもを育む体制を継続・発展させていく。 ・イベント的な参観だけでなく、日常の授業公開やボランティアの受け入れ体制を検討していきたい。 ・家庭学習や生活習慣の定着に向けた発信を工夫し、ご家庭との連携をより一層深めていく。	